

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

Differences of perspectives as grammatical phenomena in Japanese and Chinese : a case study of deictic motion verbs, passive expressions and tense/aspect

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2004-03-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 下地, 早智子, Shimoji, Sachiko メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/1041

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



日中両語における 文法現象としての視点の差異

—— 移動動詞・受身の表現・テンス／アスペクトの場合 ——

下 地 早智子

0. はじめに

本稿では、いくつかの異なる文法カテゴリーに見られる日本語と中国語の相違点が、いずれもそれぞれの言語における事象を眺める視点の取り方の違いに基づくものであることを述べる。結論を先取りすれば、日本語は相対的視点で事象を眺める傾向が中国語よりも強く、中国語は固有的視点¹で事象を眺める傾向が日本語よりも強い。そしてこのような視点の取り方の傾向の違いが両言語における、移動動詞、受身の表現、テンス・アスペクトの用法の差を生み出している、ということを主張したい。²

相対的視点とは、発話者の位置、すなわち「私、今、ここ」を基準にとる視点であり、空間指示を例にとると「前後左右」、時間指示を例にとると「昨日、今日、明日」などが相対的視点に基づく表現である。これらの表現の指示対象は、基準点である「私、今、ここ」が動けば変化してしまうという点で相対的なものである。これに対して、固有的視点とは、上記と同様の指示対象を、参

1 Levinson 1996, 井上京子 1998, Kataoka 2002, 参照。これらは、空間的指示の枠組に関する研究であり、空間指示の枠組の違いが空間と直接関わりのない文法現象と平行関係を呈するか否かについては、別に検討を要する。なお、このような視点の用法の違いは両言語を対照することによって浮かび上がってくる傾向の一つにすぎず、日本語には相対的な指示基準しか存在せず、中国語には固有的な指示基準しか存在しないということではない。

2 同様の観点に帰結させることの出来る、両言語における文法上の差異が他にも存在するものと予測されるが、本稿はあくまでも試論として、筆者がこれまでに扱ったことのある上記三つの文法カテゴリーについて考察することにする。

照点となる事物が固有に持つ形状的な特徴によって表現する方法である。空間指示では、「彼は家の前にいる」の「家の前」などがこれにあたる。これらの表現の指示対象は、話し手が「私、今、ここ」から動いてもぶれることがない。

1. 日本語における「視点の移行」³

1.1 「来る／行く」と“来／去”⁴

ダイクティックな移動動詞「来る／行く」の選択基準は、いかなる言語においても、発話時における話し手に向かう移動であるか、それとも離れる移動であるかが基本であると予測される。ところが、日本語では発話時における話し手の視点から移動を眺めた表現が不適切になる場合がある。このような状況を、大江 1975に倣い「視点の移行」と呼ぶことにする。日本語で視点が移行する場合に、ダイクティックな移動動詞「来る／行く」の選択について、中国語との間に違いが生じる。

まず、日本語では話し手が移動時に到達点にいるのであれば、「そこ／あそこ」で指される場所へ向かう移動を意味する動詞としては、「来る」を用いなければならない。(1)は過去の移動、(2)は未来の移動に、それぞれ言及する場合である。

- (1) (遠くの建物を指差して。話し手は昨日その建物にいた。)

昨日あそこに山田が 来／*行っ たよ。

昨天山田 *来／去 那儿了。

3 大江 1975, 第5章, 第6章, 参照。

4 本節は、下地 1997に加筆・修正を加えてまとめたものである。

(2) (遠くの木を指差して、あとで会うつもりで)

あとであそこに 来／*行⁵つてね。
过一会儿，请你 *来／去 那儿。

(1-2)において、日本語では移動時における到達点に視点が移行し、移動動詞「来る」が選ばれているが、中国語の視点は対話の現場を基準として“去”(行く)が選ばれる。次の(3)は未来の到達点に視点が移行しているのか、Fillmore 1971における home baseの問題⁶なのかが断定できないが、中国語においては対話の場所を基準とした“去”の使用が可能である点が注目される。

(3) (場所は日本。中国への帰国に先立ち、中国人が日本人に対して)

いつか中国に 来／*行⁶つてくださいね。
你什么时候到中国 来／去 吧！

また、日本語の伝達動詞への埋め込み文に移動動詞が用いられる文では、対話参加者が移動時に到達点にいない場合でも、伝達動詞の主語に視点を移行させることができる。

(4) 王先生が(王先生の)研究室に 来る／?行く ように言ってたよ。
王老师叫你到(王老师的)研究室 *来／去。

5 中国語では、“那儿”(あそこ)という遠称の指示詞で指される場所へ向かう移動を指す表現として、直接“来”(来る)を用いることができない。(1)の日本語を忠実に中国語に訳すには(1)'のように複雑な表現を用いるしかない。(1)'の中国語では“来／去”のいずれを用いることも可能である。

(1)' 昨天我在那儿的时候，山田也 来／去 了。

昨日私が(あ)そこにいたとき，山田も 来／*行⁶つた。

また、(2)に相当する中国語は、(2)'のようにダイクティックな移動動詞を用いない表現の方が自然である。日本語のように目的達成(会う)のためのプロセス(ある場所に行く)を要請するのではなく、目的に直接言及する方が、より中国語らしい表現だということであろう。

(2)' 过一会儿，在那儿见吧。

あとで，(あ)そこで会いましょう。

6 参照したのは、Fillmore 1997, p.77-102。

(5) 父：你瞅见金枝没有啊？

石：没有。

父：哎，这丫头。眼看就掉点儿了。这不，他娘叫我带着雨伞来接她。

父 「お前，金枝を見かけなかったか。」

石 「いいえ。」

父 「困ったやつだ。雨が降るというのに。家内が傘を持って迎えに行けというんで……」

(秋雨)

(4)は、「王先生」が聞き手に対して「王先生」自身の研究室への移動を要請したことを，話し手が聞き手に伝えようとする状況を想定した例である。日本語では，話し手は言及される発話の発信者である「王先生」に視点を移行させて移動動詞を選ぶ傾向が強いが，中国語では，対話の場所を基準として移動動詞を選ぶ。(5)において，中国語では“来”が用いられるところに，日本語では「行く」が用いられているのも同じ理由による。日本語では言及される発話の発信者である「家内」の視点から移動が描かれており，中国語では対話の場所を基準にして移動が描かれている。すなわち，中国語ではダイクティックな移動動詞を選ぶ基準が対話の場所に固定される傾向が日本語よりも強いといえる。そのような中国語でも(6b)のように，移動の到達点を再帰代名詞“自己”で限定すると，同様の状況で“来”が選ばれるのであるが，インフォーマントによると，“自己”を用いて視点を主語の人物に移行させた(6b)は翻訳臭のある中国語らしくない表現であるという。

(6) a 王さん_iが李さんに彼_iの家に 来る／*行く ように言った。⁷
小王_i请小李 ?来／去 他_i的家。

b 王さん_iが李さんに自分_iの家に 来る／*行く ように言った。
小王_i请小李 来／*去 自己_i的家。

7 「i」は，これを付した名詞句の指示対象が同一人物であることを示す。

以上、日本語では、移動時の到達点に話し手がいるときはその到達点に、そして移動動詞の文が伝達動詞に埋め込まれている時は、伝達者（＝主語）に視点が移行し、そこを基準に移動動詞が選ばれるが、中国語の視点は対話の場所に固定される傾向が強いことを見た。

1.2 受身文 — 「(ら) れる」と “／被／”⁸

日本語の受身文に直訳することのできない中国語の “／被／” 構文には次のようなものがある。

- (7) 结婚以前，请朋友吃饭，我把钱搁在皮夹里，付帐的时候掏出来装门面。现在皮夹子旧了，给我扔在不知什么地方了。 (圉)

結婚する前，友達におごるときはお金を札入れに入れて，支払いのときに取り出して格好つけたものさ。今ではその札入れも古くなって，どこへやったかさえ分からないよ。

(直訳→*私によってどこに放られたか知らない)

- (8) 这是一般戏剧家没有想到的问题而被我发觉出来的。 (侯)

これは一般の戯劇家が思いもつかない問題で，この俺が発見してやったんだ。

(直訳→*私によって発見された)

- (9) “爸爸，我要吃荔枝——” 儿子撒娇地说着。“乖儿子，爸爸吃完饭给你买去。” “不，不。我现在就要吃荔枝。” “别闹，爸爸就给你买去。” 妻子顺水推舟——洪宇飞快速铲茄子，骑车而去。

六元一斤的荔枝被儿子抱在怀里。 洪宇飞擦着满头的大汗，望着儿子夺魂的笑容，暑热皆散。 (一分間)

「パパ，レイシが食べたい!」 子供が甘えて言った。「よしよし，夕飯が済んだら買いに行ってやろう。」「やだやだ，今すぐレイシが食べたいんだ。」「騒がないの，パパがすぐ買いに行ってくれるわよ。」

8 中国語の受身の標識には，“被”のほかにも“叫”“让”“给”があるが，本稿ではこれらをひとまず同列に扱い，杉村 1982に倣って“／被／”構文と呼ぶ。なお，この節は下地 1999及び下地 2000に加筆・修正を加えてまとめたものである。

妻はとりあえず場を収めようとする—洪宇飛は急いで茄子を鍋からかきだすと自転車に乗って出かけた。

一斤六元のレイシが子供の手の中に収まった。洪宇飛は大汗をぬぐつつも、子供の愛らしい笑顔見ると暑さもすっかり吹き飛んでしまうのだった。

(直訳→*一斤六元のレイシが子供によって懷に抱えられた。)

- (10) [旅先で知り合い一夜を共にしたある女性が、主人公の男性に髪留めを一つ残して去る]

那枚发卡被我揣在口袋里，没出半个月我就掏出来扔了 (対面)
その髪留めを私はポケットにしまったが、半月もしないうちに取り出して捨てしまった。

(直訳→*その髪留めは私によってポケットにしまわれた。)

(7-10) とは逆に、原田 1995が指摘する (11) のような日本語の受身文は中国語では／被／構文に訳すことができない。

- (11) a. 弥吉は悦子と二人きりの数時間に邪魔を入れられたくなかったのである。

弥吉不愿意与悦子二人单独相处的几个小时里，有人来妨碍事的。

- b. 亡夫が所持していた釜と夫人に言われても、菊治は反発を感じなかった。

尽管夫人说这本是他亡夫的茶壶，菊治也无反感。 (原田 1995)

(11a) は話し手（物語の語り手）が「弥吉」の視点から叙述を行った文である。(11b) は「菊治」の視点から叙述が行われた文であり、主節と従属節の視点を一貫させるために受身が用いられている。日本語では話し手が動作者よりも動作の対象の方に共感を寄せ、動作の対象側の視点から事象を描こうとする場合に受身の形式が用いられる。⁹ 一方、(7-10) の中国語で／被／構文の主

9 すべての受身文がこの動機で用いられるという訳ではない。

語に選ばれているのは、話し手が共感した相手ではなく、その場面で注目される[+変化]の主体である。例えば(7)では、「札入れ」がクローズアップされており、それがどのような変遷をたどるかが描かれている。(11)が／被／構文にならないのは、主語が[+変化]の主体ではないからである。¹⁰

日本語の談話は、視点を一貫させて叙述を行う傾向がある。¹¹物語の語り手が、ある特定の登場人物の立場から事象を描くことも、視点の移行であるといえよう。(12)では話し手が「花子」に視点を近づけた(12a)が、日本語としては最も自然であるが、同じ内容が中国語ではほぼ(12c)のように表現される。

(12) a. 先生に呼ばれて、花子は学校へ行った。

b. 先生が呼んだので、花子は学校へ行った。

c. 先生が呼んで、花子は学校へ行った。

いくつかの事象を組み合わせる一つのエピソードにまとめあげるとき、日本語ではある人物の視点を基準に据え、一つの視点によって個々の事象を一つの談話にまとめる方略をとることが多い。一方、中国語による語りにおいては、日本語ほど視点の統一に拘泥しない傾向がしばしば観察される(例(13)(14))。中国語の談話では、「誰がどうした」「何がどうなった」という一つ一つの事象はそれぞれについて目立つ事物を中心に描かれ、個々の事象は現実の時系列に沿って、現実には忠実に配置されるようである。

(13) 他刚从部队复员回来，在工程队当工人，(a)他们队有援外任务，到赞比亚去，挑上了他。他呢，想在走之前把“个人问题”解决了，(b)就有人介绍了我。
(北京人)

彼は部隊から復員して戻ったばかりで、工事作業班の労働者だった、
(a)彼らの班には海外援助の任務があり、ザンビアへ行くのに、彼を選

10 木村1992, 参照。

11 久野1978, 参照。

んだ。彼は、出発前に「個人的問題」を解決しようと考え、(b)そこである人が私を紹介した。

- (14) 有一回，两个小子劫住我，我告诉他们“我没钱，我是徒步考察的”，他们要我把衣服扒下，互相僵持在路上。 (北京人)

ある時，二人のチンピラが僕を襲って，僕は彼らに「僕は金を持っていない，僕は徒歩の視察旅行者なんだ」と言った。彼らが僕に服を脱ぐよう要求するんで，路上でお互いに睨み合った。

(13) の日本語は中国語の直訳である。より自然な日本語にするには，話題になっている「彼」に視点を近づけて，(a)は「彼らの班には海外援助の任務があり，ザンビアへ行くのに，彼が選ばれた」と受身文を使い，(b)も「そこで私が紹介された」とした方が良い。(14) の日本語も中国語の直訳であるが，日本語では中国語のように，主語が頻繁に交替する全ての文を読点で繋げるのは難しい。これも日本語では，視点を近づけた主体が主語に選ばれ，一つの談話においては視点が一人の登場人物のものに統一される傾向が強いからである。

以上，日本語の受身には話し手の動作の受け手への感情移入による視点の移行が働きやすいが，中国語ではそのような視点が日本語ほど多用されず，ある[+変化]の主体に着目し，その変遷を追うような場合に受身の表現が用いられることを見た。

2. 時間の表現

2.1 「た」と“了”のずれ方

日本語にはテンスがあるが，中国語にはテンスがないと言われる。テンスとは，基本的には発話時，すなわち話し手にとっての「今」を基準点に据えて出来事の時間関係を眺めるという相対的な時間の捉え方である。また，アスペクトとは「点的」「線的」等，現実の時間軸上に展開する，出来事そのものの固有の形状による時間の捉え方であろうと考えられる。

次の例においては、中国語では“了”が必須であり、日本語の過去を表す「た」に対応しているように見える。

- (15) a. 我昨天去了。(私は昨日行った。)
b. 我昨天看了一个电影。(私は昨日映画を見た。)
c. 我昨天工作了八个小时。(私は昨日八時間働いた。)

張繼英 2000によると日本語の「た」と中国語の“了”が非対応となる場合には次のようなものがある。¹²

(16)① 過去の反復的・習慣的な動作を表す場合

- a. 以前は週に一回必ず家に手紙を書きました。
以前我每星期一定要给家写一封信。
b. 学生のころは毎日日記を付けていました。
我在学生时代每天记日记。

② 過去の状態を表す場合

- a. 車がなかなか来ないので彼は相当いらいらしていた。
(当时) 车迟迟不来, 彼等得很不耐烦。
b. この辺は昔は静かな町でした。
这一带以前是很安静的地方。

③ 人や物事の過去の属性、趣味、所在などを表す場合

- a. このテレビは一昨日からずっと調子が悪かった。
这台电视从前天开始一直有毛病。
b. 父は昔からお酒が好きでした。
父亲很早以前就喜欢喝酒。
c. 結婚するまで父の会社で働いていました。
结婚前我在父亲的公司工作。

④ 過去の動作進行を表す場合

12 以下 (16) ①～④は張繼英 2000からの抜粋。

私が行ったとき彼はちょうど本を読んでいた。
私去的时候他正在读书。

(15) のように必ず“了”を用いなければならない文と (16) のように“了”を用いてはならない文の違いは何だろうか。¹³ (15) 及び (16) の日本語で「た」が用いられるのは、日本語の話し手が発話時（すなわち話し手にとっての「今」）に視点をおき、そこから出来事を振り返って眺めているからである。¹⁴ (16) に特徴的なのは、事象を時間的にどこで切り取っても同じ場面が見えるという事象の等質性（homogeneous）である。そこで、ごくおおざっぱではあるが、中国語のアスペクト助詞“了”は、それが開始点であれ終了点であれ、ある動的事象における [+変化] の点に話し手が着目し、それが現実存在すると確信している場合に用いられるものと仮定してみたい。日本語との最大の違いは、そこに発話時における視点が関与しないことである。[+変化] の存在が実際に確信できるのは、その事象が生じた後であるのが通常なので、(15) の“了”は過去を表しているように見える。

以上を検討するために、“了”が「た」ではなく「ている」や「する」に訳される場合について考察してみよう。

(17) 魯四鳳：哦！（叹了一口气）——你为什么不叫底下人替你来？何必自己跑到这穷人住的地方来？

周 冲：（诚恳地）你现在怨了我们吧！（雷）

魯四鳳 まあ！（ため息をつく）——どうして、お使いのものに、もたせておよこしになりませんでしたの？なぜ、わざわざ、ご自分で、こんなむさくるしいところに、いらっしゃいましたのですか？

周 冲 （優しく）君は、いま、ぼくたちをうらんでいるのだろう！

13 井上 2003は、事象が量的限界で区切られた‘閉じた線’としての形をもつ場合には“了”、‘開いた線’としての形をもつ場合には“着”が用いられるとする。そう考えると (16)①～④は“着”と同じく‘開いた線’を持つ事象ということになり、両者の差が不分明である。

14 (16)③a bのように、発話時においてもその出来事が続いている例については、井上 2001を参照。

(18) 魯大海：少爷，我们用不着你们的安慰，我们生成一副穷骨头，用不着你半夜的时候到这儿来安慰我们。

周 冲：你大概是误会了我的意思。

魯大海：我没有误会。 (雷)

魯大海 坊ちゃん，おれたちは，あんたの見舞なんかいらねえんだよ。おれたちは生まれ落ちた時からの貧乏人だ。夜更けに，あんたなんかに見舞いに来てもらいたかねえよ。

周 冲 きっと，あなたは，ぼくの気持ちを誤解しているんですよ。

魯大海 おれは誤解なんかしていないね。

(19) 哦，是这么回事啊，我还以为打眼了昵，我也参加了这一带的联防，哎，可我没听说过要取缔《人间指南》这本书啊？ (编辑部)

私もここら一帯の連合防犯隊に入ってますけど、『人間指南』という本を取り締まるなんて聞いたことはありませんよ。

(20) 我们单位呀，给办公室订了不少的杂志，好的呢，都让同事拿回家去了，办公室里边呢，都是些没人看的。 (编辑部)

会社でね，仕事場にかなりの雑誌をとってくれているんですよ。良いものは同僚に家に持ち帰られてしまって，ここにあるのは見る人のないものばかりでね。

(21) 我就买了一瓶醋，给了你十块钱，你没找钱。

——不可能。你再好好找找。

我就带了十块钱，全给你了，你没找我。

——不可能，找你了。 (贫嘴)

「私は酢を一瓶買って，あんたに十円払って，あんたはおつりをくれなかった。」

「そんなはずないよ。もっとちゃんと探してみなよ。」

「私は十円札だけ持っていたんだ，全部あんたに渡した。あんたはおつりをくれてない。」

「そんなはずないよ，おつりは渡したよ。」

(17-21) は，日本語では発話時 (=話し手にとっての今) に視点がおかれ，

当該の事態がその視点と同時に存在するので「ている」が選ばれる。一方、発話時における視点がそもそも時間表現に反映しない中国語では、[+変化]の動的事象が現実存在することのみが見つめられており、それが“了”で表される¹⁵。例えば(17)においては、日本語では「うらむ」という事態が発話時と同時に成立しているので「ている」が選ばれるが、中国語では「うらんでいない」状態から「うらんでいる」状態への[+変化]が現実存在することが重視され、“了”が用いられる。次の図1は両者の違いを図示したものである。図中の円は事態の成立点、すなわち[+変化]の点を表す。

同じ事態を描いているので、いずれの図にも事態の成立点は存在しているが、「ている」では点そのものは目立たなくなっており、発話時とその事態が同時に成立していること、すなわち発話時と事象の相対的關係が重視される。一方、“了”の方には、発話時の視点が存在せず、事態が事実として成立した点の存在自体が重視される。

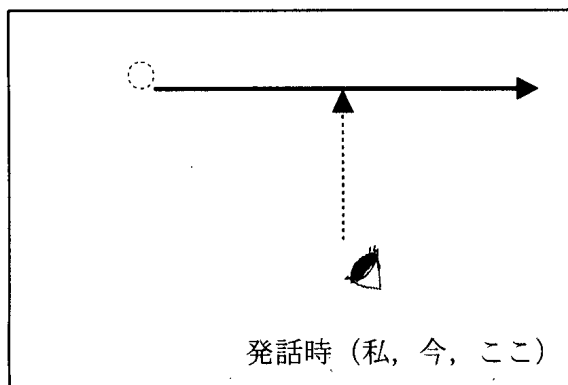


図 1-1 「ている」

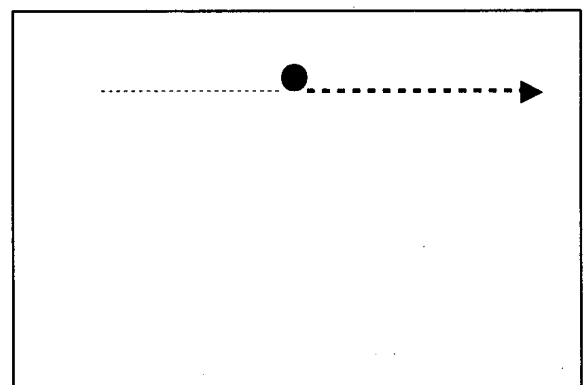


図 1-2 “了”

15 木村 1982が“着”と「ている」のずれについて論じているアスペクトの“近視眼的”なパースペクティブとテンスの“遠視眼的”なパースペクティブという対立 (p.31-32), 及び井上 2003の中国語の動詞接尾辞“了”(完了), “着”(継続)は<事象そのものの形>を描き、日本語の「スル/シタ」(完成相)と「シテイル/シテイタ」(継続相)の対立は<事象と時間の関係づけ方>に関する対立である, という指摘を参照。本節は, これらの先行研究による指摘を, 「相対的視点/固有的視点」という角度から捉えなおしたものである。

2.2 「ている」と“了”／“着”

一般に“了”は「完了相」，“着”は「継続相」を表すとされるが、両者は広義の存在表現において使い分けが不分明になる。

- (22) a. “讨厌”林蓓白了已远远而去的马青一眼，回头甜笑着。她穿了一领印着个大大“P”字的棉织圆领衫。 (玩)

リンペイはすでに遠く運ばれていった馬青にツンと冷たく一瞥くれてから、くるっとふり返ってクスッと笑った。彼女は大きく「P」のアルファベットがプリントされた綿の丸首のTシャツを着ていた。

- b. 宝康穿着闪亮亮的西服，挺胸凸肚地背手站在于观身边，满意地注视着湿漉漉的台阶上移步款行的一对对头发蓬松面孔苍白的西服革履的男女，笑咪咪地问于观： (玩)

宝康はパリッとした背広を着込み，胸も腹もそっくり返らせ，晴れがましい顔で于観の隣に立っている。

- (23) a. 他穿了一件工人的蓝布褂子，油渍的草帽在手里，一双黑皮鞋，有一只鞋带早不知失在哪里。 (雷)

彼は紺色の作業服を着ており，油のにじんだ麦藁帽子を手にしている。

- b. 左腋下挟着一只球拍，右手正用白毛巾擦汗，他穿着打球的白衣服。 (雷)

左の脇にラケットをかかえ，右手の白いタオルで汗を拭いており，彼はテニス用の白い服を着ている。

“着”は〔＋変化〕という動的事態の後の結果継続部分に着目し，動的事態の結果，ある事物がどのように存在するかを描写する。¹⁶

図1-2との違いは，〔＋変化〕の成立点が背景化され，その代わりに結果継続部分が前景化されている点である。図1-2と図2の対立は，一見井上 2000，

16 梁紅 1999，参照。

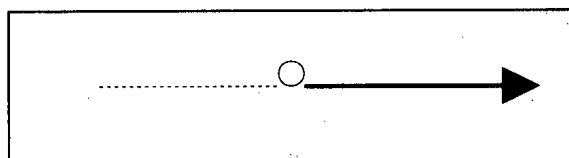


図2 “着”

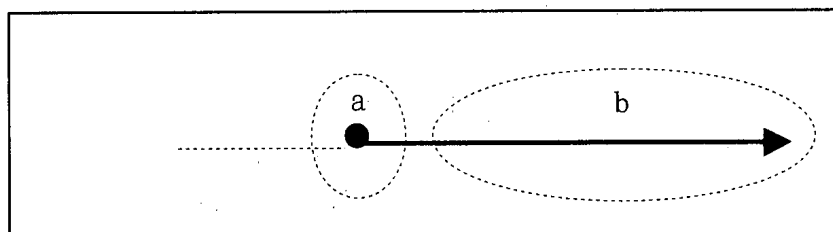


図3

2003の‘閉じた線’ vs. ‘開いた線’ という図による対立と非常に異なるようである。しかしながら、井上 2000, 2003と本稿が異なるのは、“着”が[+変化]という動的事態の存在を前提にしているということだけである。(22) (23) のような例は、図3のaの領域が前景化されているか、bの領域が前景化されているかで、同じ事態の‘閉じた線’ (点) の部分が注目されたり ‘開いた線’ の部分が注目されているということに過ぎない。¹⁷

ある事象について、aの領域に着目するかbの領域に着目するかが自由になる場合が生じるのも、中国語のアスペクト形式の選択には発話時現在における視点が関与せず、事象そのものの持つ形が重視されるからである。

2.3 補足—中国語の事象の否定

“了”の使い方と関連して、中国語の“不”と“没”という二つの否定辞の使い分けについて補足しておきたい。

木村 1997では、“不”を「論理否定詞」，“没”を「相（アスペクト）否定詞」と呼んでいる。下地 2001では“不”を「主観的意思」や「状態・習慣・属性」

17 (22) (23) の状況が生じる動詞は、着脱動詞のように「動作開始」「動作進行」「動作終了」「結果継続」など様々なアスペクト的局面を有する動詞に限られる。

など「非現実」(脱時間的な事態)の動作を否定するもの、“没”を「現実」(現実の時間軸と結びついた個別的事態)の動作を否定するものであるとしたが、その場合の「現実／非現実」という概念規定が極めて曖昧であった。井上2003は、「動作」と「状態」は一定の時間的な幅を有するモノとしての実体を持つ事象であり、これに対して「変化」は「状態なし」と「状態あり」の〈境界〉としてのみ存在し、それ自体にはモノとしての実体がない、そしてモノとしての「状態」が存在しないことは“不”で表され、「状態出現」という推移の不存在は“没”で表されると主張している。井上2003の主張は、まず状態描写の“着”や動作進行を表す“在”の否定が“没”になるという事実と矛盾するように思われるが、もう一つの問題点として、中国語ではモノの存在の否定は“没”で表されるということがある。(cf. 屋里没有人。／部屋には人がいない。)¹⁸

本稿では“没”による否定は、話し手が当該の事象について、過去・現在・未来を問わず、[+変化]の点が現実存在しないと認識していることを表すものと捉える。“着”や“在”は“没”による否定を受けるが、実際に否定されているのは“着”や“在”が前提とする[+変化]の存在である。

3. ま と め

1.1ではダイクティックな移動動詞を選ぶ場合、日本語では移動時の到達点に話し手がいるときはその到達点に、そして移動動詞を主動詞とする文が伝達動詞に埋め込まれているときは、主節の主語である伝達者に視点が移行し、そこを基準に移動動詞が選ばれるが、中国語の基準は対話の場所に固定される傾向が強いことを見た。1.2では、日本語において受身が用いられる動機の一つには、話し手の動作の受け手への感情移入という視点の移行の働きが挙げられるが、中国語ではそのような視点が日本語ほど多用されず、ある[+変化]の主体に着目し、その変遷を追うような場合に受身の表現が用いられることを見た。

18 “他不在”(彼はいない)は、“他”(彼)の存在がすでに前提となっており、その所在場所が発話の場所ではない、ということを意味する文である。

第2章では、井上 2000, 2003を部分的に改めつつ継承し、日本語のテンス的形式の対立は発話時の視点と事象との相対的關係が重視され、中国語のアスペクト助詞の対立には、発話時の視点が介在せず、事象そのものの形が重視されることを確認した。

本稿で取り上げた三つの文法カテゴリーの全てにおいて、日本語と中国語は多くの共通の特徴とともに若干の用法のずれを有している。本稿は特にそのずれの部分だけを取り上げて観察した。その結果、それらのずれは全て両言語の持つ事象の眺め方の傾向の違いに帰結される可能性のあることが分かった。すなわち、日本語は事象を言語化するにあたり、その事象を眺める視点が介在し、その視点が様々な動機に基づいて移行する相対的なものであること、これに対して中国語の方はそうした視点なしに事象そのものの呈する固有の特徴を忠実に写し取ろうとする傾向が強いということである。

<参考文献>

- 相原 茂 1979「中国語動詞の特異性と普遍性——一見相反する意味を持つ動詞を中心として」『漢文学会会報』38号：15-35.
- 方 经 民 1987「汉语“左右”方位参照中的主观和客观」『语言教学与研究』第3期：52-60+154.
- Fillmore, Charles J. 1997 *Lectures on Dexisty*. CSLI Publications.
- 原田寿美子 1995「中国語の受動態について——主語の選択の観点からの問題提起」『名古屋学院大学外国語学部紀要』第6巻第2号：231-242.
- 井上京子 1997『もし「右」や「左」がなかったら——言語人類学への招待』大修館書店.
- 井上 優・黄 麗華 2000「否定から見た日本語と中国語のアスペクト」『現代中国語研究』第1期：113-122.
- 井上 優 2001「現代日本語の「タ」——主文末の「……タ」の意味について——」つくば言語フォーラム編『「た」の言語学』ひつじ書房.
- 2003「『テンスの有無』と文法現象——日本語と中国語」平成13-14年度科研費報告書『時間表現・空間表現の意味の構造化に関する日本語と中国語の対照研究』研究代表者 井上優.
- Kataoka, K. 2002 Linguistic Anthropological Research on Spatial Cognition in European and Non-European Settings. 『言語と文化』No.3：141-164.

- 木村英樹 1981「被動と『結果』」『日本語と中国語の対照研究』No.5:101-112.
 ——— 1982「中国語」『講座日本語学11 外国語との対照Ⅱ』明治書院:19-39.
 ——— 1997「‘変化’和‘動作」『橋本萬太郎記念中国語学論集』内山書店:185-197.
 久野 暉 1978『談話の文法』大修館書店.
 Langacker, R.W. 1991 *Concept, Image, and Symbol: The Cognitive Bases of Grammar*. Berlin: Mouton de Gruyter.
 Levinson, S.C. 1996 Frames of Reference and Molyneux's question: crosslinguistic evidence. In P.Bloom et al.(eds.), *Language and space*, 109-169. Cambridge, MA: MIT Press.
 梁 紅 1999「中国語の結果相 (resultative) とパーフェクト (perfect)」『中國語学』246号:175-184.
 大江三郎 1975『日英語の比較研究—主観性をめぐって』南雲堂.
 讃井唯允 1998「中国語の『文終止』とコンテクスト性」『現代中国語学への視座・言語篇』神奈川大学中国語学科編, 東方書店:31-41.
 ——— 2000「“在等”“在着”“在等着”」『人文学報』No.311:53-73.
 杉村博文 1982「『被動と「結果」』拾遺」『日本語と中国語の対照研究』No.7:58-82.
 下地早智子 1997「移動動詞に関わる『視点』の日中対照研究」『中國語学』第244号:132-140.
 ——— 2000「日本語と中国語の受身表現について—機能主義的分析—」東京都立大学人文学部『人文学報』311号:75-91.
 ——— 2002「現代中国語におけるアスペクト助詞“了”と『文終止』問題について」『神戸外大論叢』第53巻第1号:77-96.
 張 継英 2000「日本語の『た』と中国語の『了』の相違」『日本と中国ことばの梯』くろしお出版.

<用例出典>

- (秋雨)／广播剧「秋雨」『北京放送ヒアリング講座 中国語の世界』北京放送局日本語部編, 東方書店。
 (围)／『围城』钱钟书, 人民文学出版社。
 (侯)／『侯宝林相声选1』中国唱片总公司出版。
 (一分間)／『統一分間小説選』東方書店。
 (対面)／『対面』铁凝, 河北教育出版社。
 (北京人)／『北京人——100个普通人的自述』张辛欣 桑晔, 上海文艺出版社。
 (雷)／「雷雨」『中国话剧选(一)』上海文艺出版社。
 (编辑部)／『编辑部的故事』北京电视艺术中心制作。
 (贫嘴)／『贫嘴张大民的幸福生活』北京电视艺术中心, 北京电视台摄制。
 (玩)／「玩主」『王朔自选集』华艺出版社。